

## 大町桂月 その人間像

廣澤 将城（高校九期）

### 桂月と出雲

漱石には、「第一流の批評家」（『わが輩は猫である』の苦沙弥先生）と言わせ、龍之介によれば、桂月の文章は「一人前の士人」でないといふと理解できないとまで評させた大町桂月。

大町芳衛（雅号）桂浜月下漁郎（縮めて、桂月）は、明治二（一八六九）年一月、高知市に生まれた。東京帝国大学在学中から「国文学」の編集にあたり、頭角を表わした。その桂月は、明治三十二（一八九九）年春から翌年夏まで、今市町にあった郡立簸川中学校（大社高等学校の前身）に、（月俸七十五円）年額九百円。当時の横沢文也校長の年俸は八百円（国語教師として奉職した。妻・長兄で詩人・国文学者の塩井正男号は雨江。一八六九～一九一三）が、教頭だったという縁もある。

しかし、若くして既に文名高かった桂月が出雲の地に留まるはずはなく、明治三十三（一九〇〇）年秋、上京して博文館に入社、以後六年間にわたって在職し、「太陽」「文芸倶楽部」などといった雑誌に、評論・韻文・隨筆・紀行文・史伝・人生訓などを発表。ことに美文の紀行文は広く読まれた。

博文館は、東京にあった当時の日本最大の出版社で、明治二十八（一八九五）年に総合雑誌「太陽」を発刊して全盛期を迎えた。周囲に内緒で秘密裡に上京した桂月であったが、博文館は彼に三顧の礼を尽くして迎え入れたという。当時の編集主幹、高山樗牛が外遊することになり、後を継ぐ形で博文館に深く関わった。だが、酒が過ぎて退いた。

ところで明治三十四（一九〇一）年刊の『一笠』所収の「出雲雑感」で、桂月は、鋭い出雲人批判を展開した。曰く、「柔弱にして陰険なりとの一語は、今の出雲人の免るゝ能はざるところなり」「人情は軽佻なり」「義に勇む俠骨なし」「小利口なれど誠意と人情なし」。このような文から、「桂月は出雲

及び出雲人をけなしでいてけしからん」という桂月観が出雲地方では根強い。

しかし、やがて桂月の出雲観を一変させる出来事が起こる。大正七（一九一八）年、桂月は三十八年ぶりに郷里高知へ帰省する。この時「願開舟」を巡る話を初めて知る。すなわち、江戸時代の天明年間に土佐に住んでいた男が、出雲大社にお願いして病気に苦しむ村人を助けようと思い、小さな木彫りの船に賽銭を入れて村を流れる吉野川に流した。この船が不思議なことに一年半後に稲佐浜に流れ着いて、村民の幸せを願う祈りが出雲に通じたのである。桂月は驚愕する。大正九（一九一四）年一月、出雲を訪れた際には、出雲大社に直行して参拝し、この船に對面して大感激し、思いを七言絶句の漢詩にして残した。

そして、この再訪を含め、次に列挙するような旧知の多くの人たちに実に温かく迎えられ、交友・交遊の輪が広がった。井原録之助（雲涯。同僚中、一番の理解者。齒科医。井原協一の父）、森山文吉（其甥。松江中学や母校の教諭。旧出雲市長・森山繁樹の父）、三原氷志郎、安田恭平、錦織雄太郎（綱堂）。桂月は招かれて雨江と共に長男同行で多伎町小田温泉に遊ぶ。一説では、桂月が彼の恩人が残した借金の返済に苦しむことになった時

に助けてもらった人物)、千家尊統宮司、千家

尊有管長、小野尊正宮司(日御碕神社)、大村

貞蔵。なかんずく、稲田三郎の厚情に桂月は心揺さぶられる。稲田は将来を囑望されて上

京して医学部で勉強するが、その最中に失明、帰郷して指圧師を生業にしていたが、毎晩、桂月の宿泊先を訪れて指圧をして疲れを取っ

てくれた。その姿に桂月は「真人(眞理を悟った人、阿羅漢、仏をいう)」を見た思いがすると述べている。

こうした厚情にふれて、桂月の出雲人を見る目が変わり、出雲は「第三の故郷」だと位置づけるほどになっている。三瓶山や大山を熱愛し、鬼の舌震、立久恵峡、加賀の潜戸を広く世に紹介している。

## 「人の運」

ここで桂月の人間像を見る上で、彼が記したものを見てみよう。

大正二(一九一三)年、至誠堂発行の書籍で、桂月は、人の運には大別すれば「初運

中運 晩運」があるとした上で「運は運なり 運転するなり(運は決まったものではなくて、努力によって転ずるものだ)として次のように述べている。少し紹介しよう。

「独断の人を去って果断の人に来る」

(「独りよがりの人でなく、思い切ったことをする人に運が開ける。」)

「躁急(そうきゅう)の人を去って勇往(ゆうおう)の人に来る」

(「せっかちな人ではなく、くじけずに目的に向かつて邁進する人に運は開ける。」)

「過去を思ふ人を去って現在を思ふ人に来る」

「現在を思ふ人を去って未来を思ふ人に来る」

また、大正三(一九一四)年に記した「作文十則」には彼の人間像をみごとに表す次のような文章がある。抄出してみよう。

「実用文と美文との区別

美文は、おもに感情に訴ふる文章也。実用文は実に人の理性に訴ふる文章也。美文を譬ふれば、草木の花の如し。人の目を喜ばしむるに足れど、実用に役立たず。実用文は材木の如し。人の目を喜ばしむるものなけれど、家屋器具など至る処、実用に役立つ。」

「文章と思想との関係

文章の外形は詞藻(しそ) (言葉の綾)也。内容は思想(こうえ)也。思想内にありて、詞藻外に発す。これ即ち文章也。根のなき花木は忽ち枯れる。思想の根なくては、文章の花豈に長

く栄えむや。詞藻は末也。万古不朽の思想ありて、文章初めて万古不朽也。」

「文章と人格

詞藻と思想ありて文章成る。されど、詞藻と思想の奥に、作者の人格あることを忘るべからず。

人格高く且つ大にして、識見あり、思想あり、信念あり、気力あり、経験あり、金銭に役せられず、物質に累せられず、私欲の奴隷とならず、名利に拘束せられず、腹に人道あり、国家あり、公益あり、眼(まなこ)、古今東西を空しうして、而して文才ありて、初めて真の大家也。」

## 金と酒

長男の芳文が「父と酒とは、決して切り離しては思い出せない」といみじくも語ったように、桂月は終生、酒と旅を愛した。

大正三(一九一四)年七月八日の日記には「原稿料一万円 貧乏文士桂月(にわかたいじん)俄大尽となる」、十日の日記には「初めて人間並み」と記した新聞の切り抜きがある。その概要は、岩崎財閥から創設者岩崎弥太郎の伝記執筆の依頼があったが、四ヶ年間も執筆しなかつたため契約解雇が通告され、桂月はあわてて伊豆大島で脱稿し、一万円を入手した。原稿料を家族のために使えば家庭円満、家運長久疑いなきものを、桂月は、友人知人五十余名を呼び

出し、高級料亭で盛宴を張り、牛飲馬食した。

## 終焉の地

桂月は青森県の十和田湖と奥入瀬おいらせをことに

愛し、晩年は同地のつた蔦温泉（現・青森県十和

田市）に居住し、大正十四（一九二五）年三  
月には本籍も蔦温泉に移したが、六月、死去。

享年五十六歳。彼は全国の名山を踏破してお  
り、五月にも登山を楽しんだほどだったが、

病没した。最期には「まわし蝮焼酎」で失った意識  
を取り戻し遺言したという。

遺族は、妻・長との間に四男二女。最期の  
場面は義姉・塩井ふくが著した「臨終の桂月」  
に詳しい。辞世の一首は

「極楽へ越ゆる峠の一休み 蔦の出湯に身  
をば清めて」であった。



（文責・引野律子^高校二十期^）